〔藻鹽草八〕葵

あふひ草、又たばかりあふひも云葵はなさく、もろかづら、もろは草、二葉草、神山によめりかざし草、かざしの草と、もじありて、も、ひかげ草、是も異名とふるき物にあり、すこし不審、かたみぐさ、○註略庭草、これはつちあふひなり、ちしは草の事也、又にはの草とも、たゞにには草共いふと、ふるき物にいへり、からほひといへり、是馬也、からあふひ也、あふひはかも神山、また松尾山にも、みあれひくけふに葵、

〔和漢三才圖會九十四濕草本〕菟葵○略中

山州賀茂山中有二葉葵、毛呂久佐波布地生、其葉圓而微尖、面青背帶紫色、賀茂神事著葵於桂木枝、掛簾及器、謂之葵祭、毎年四月中酉日被行之、獻葵於北山中村、

〔古今和歌集十物名〕あふひ　かづら

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしと思はざるべき　よみ人しらず

人めゆゑのちにあふひのはるけくばわがつらきにや思ひなされん

〔古今和歌六帖六〕あふひ

思ふなかさけにゑひにし我なればあふひならではやむ藥なし

〔古今和歌六帖標注六〕童蒙抄卷五に、酒にゑひたるには、あふひの實をくへばさむといへりとみゆ、今按ずるに、こは何によりてかくいはれたるにか、物に見えず、

〔枕草子三〕草は

あふひいとおかし、祭のをり神代よりして、さるかざしとなりけん、いみじうめでたし、もの、さまもいとおかし、

〔枕草子八〕うつくしきもの

あふひのちひさきもいとうつくし、何も〳〵ちひさき物はうつくし、